薬師寺式三手先と法隆寺式組物

はじめに　寺院、宮殿建築において組物は最も特徴的で、重要な建築要素のひとつである。外観的特徴によって、舟肘木、大斗肘木、平三斗、出三斗、出組、二手先、三手先などに分類されている。『建築大辞典』（彰国社刊）で「三手先」をひくと、薬師寺東塔と唐招提寺金堂の側柱筋から外側部分の断面図が示され、三手先は「三手先組の略．斗きょう形式の一．壁面から前方へ斗組みが三段に出ているもの．」と定義されている。さらにつづけて「薬師寺東塔（730）が現存最古の例であるが，まだ，軒支輪はなく，斗の上には必ず斗が載らないし，尾垂木上の三手先の位置も自由．唐招提寺金堂で軒支輪が付き、前方の構造体が横に連結され，当麻寺東西塔（奈良時代）で斗の配置は整備される．隅における斗きょうの組み方は平等院鳳凰堂（1053）で完成され，今まで自由であった三手先組の形式が一応完成する．」とあり、三手先の発展過程についても記されている。薬師寺東塔の三手先は初期の段階の形式で、唐招提寺金堂、当麻寺東西塔、平等院鳳凰堂へと発達していくと認識されている。薬師寺東塔より古い法隆寺金堂・五重塔等の組物は薬師寺東塔以降の三手先組物とは別系統のものとされているようである。「壁面から前方へ斗組みが三段に出ているもの」という三手先の定義にあてはまらないからであろう。

昨年度の年報でも述べたが（拙稿「古代建築における三手先組物について」）、この説明で気になることは、組物を外観的特徴だけでとらえていることである。桔木の発明により構造的意味合いが薄れた中世以降であればこれでよいかもしれないが、少なくとも古代においては組物は軒を支えるという構造的役割をもつ装置である。特に三手先のように深い軒を支える組物においては、軒下だけでなく、主体構造部まで含めて論じる必要がある。

本稿は、これまで異なった系統の組物形式とされてきた薬師寺式三手先と法隆寺式組物について、構造的視点で比較検討を行いながら、それぞれの構造について考察したものである。

薬師寺式三手先の構造　薬師寺式三手先の建物には薬師寺東塔以外には、海龍王寺五重小塔が現存する。

薬師寺式三手先は、大斗の上に枠肘木が組まれ、その上に、壁付は通肘木、手先方向は力肘木が組まれる。この力肘木は建物を貫通し、反対側の組物の力肘木となる。その上にもう一段枠肘木が組まれ、さらにその上に通肘木が三段井桁に組まれる。最上の通肘木が側柱筋の桁になる。四天柱上に組物を介して束がたてられ、その上に三重に重ねて横材が井桁に組まれる。第一、第二の横材の間から尾垂木が側柱筋の上から第二、三番目の通肘木間をとおして、外方に出される。先端に平三斗がおかれ、丸桁をうける。（図１参照）

法隆寺式組物の構造　法隆寺式組物をもつものには、法隆寺金堂、同五重塔、同中門、法起寺三重塔が現存する。

法隆寺式組物は、大斗の上に枠肘木の役割をもつ雲肘木がのり、その上に壁付方向に通肘木、手先方向に力肘木を組む。その上に壁付に三段の通肘木を組み上げる。最上部の通肘木は柱筋の桁となる。入側柱筋の束上の横材から柱筋の上から第二、三番目の通肘木の間を通して尾垂木が前方に出される。尾垂木先端に雲斗がおかれ、丸桁を受ける。（図２、３および写真１参照）

両者の組物と唐招提寺式三手先　紙数の関係で細かな説明は省略するが、右ページの図や写真をみれば明らかなように、両者の構造は、雲肘木等細部の違いはあるものの、枠肘木の上に力肘木をのせ、その上に通肘木を数段組み上げることや尾垂木の納め方など、構造的な原理は基本的に同じである。このような両者の構造は、校倉の構造と近似する（図４）。

隅において法隆寺式組物は隅方向にしか手先が出ず、この点は両者の大きく異なる点である。

唐招提寺金堂以降の三手先は、二手目に組物間を繋ぐ通肘木が入り、逆に柱筋の尾垂木上の通肘木を一本減らすなどの相違点がみられる。このタイプの三手先からは校倉構造を連想できない（図５）。

薬師寺式三手先は、唐招提寺金堂以降の三手先と斗や肘木などの構成材の形状は似ているものの、全体的な構造は法隆寺式組物に近いといえる。

おわりに　以上のように薬師寺式三手先および法隆寺式組物について構造的な視点で考察した結果、これまでの認識とは異なる見解を得た。

今後は、構造的な視点とさらに施工的な視点も加えて、組物の発展過程を解き明かしたいと考えている。

（村田健一／建造物研究室）

図１　薬師寺東塔初重の軸組と組物（復原）

図２　法隆寺五重塔の組物（『法隆寺　最古の木造建築』草思社より）

写真１　法隆寺金堂初重の組物（修理工事報告書より）

図３　法隆寺金堂初重の組物

図４　校倉の構造　東大寺勧進所経庫（修理工事報告書より）

図５　唐招提寺金堂の三手先